

県岐商 だより

THE KEN-GI-SHO SENIOR-HIGH PRESS

No.
88○発行所 岐阜市則武新屋敷 岐阜県立岐阜商業高等学校PTA <https://school.gifu-net.ed.jp/wordpress/gifu-chs/>

文化祭 2025.10.24

近年、スポーツ界を中心に『プレイヤーズセンタード』という考え方が広まり、学校教育にも浸透しつつあります。

かつては、指導者が絶対的な権限を持ち、選手がそれに従う「トップダウン型」の指導が主流でした。しかし、勝利至上主義や体罰・ハラスメントが社会問題となったことを受け、「プレイヤーズファースト」という理念が登場しました。ところが、その解釈が曖昧なまま広まった結果、「選手のため」「選手が望むから」といった言葉が指導者個人の価値観を正当化する手段となったり、逆に過保護や放任に陥るケースも見られ、本質的な変化には至りませんでした。

そこで注目されるようになったのが『プレイヤーズセンタード』です。これは、選手（生徒）を中心に据え、主体性や自律性を尊重しながら、指導者（大人）が伴走者として成長を支えるというスタイルです。

近年、様々な競技でこのスタイルによって成果を上げている事例が増えています。本校硬式野球部も「考える野球」を標榜し、主体性を重視したチームづくりを進めてきました。その結果、短期間で大きく成長し、夏の甲子園ではベスト4に輝きました。生徒が発案した「ロボトップ」を合言葉に、苦しい場面でも笑顔で乗り越え勝ち進む姿は、多くの人々に感動を与えました。

では、この指導スタイルが本当に「正解」だと言えるのでしょうか。

学校教育の根拠となる学習指導要領では、日本政府が提唱する Society5.0（超スマート社会）を背景に、未来

社会を生き抜く力として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の3つの柱を掲げ、「主体的・対話的で深い学び」を通じてこれらの力を育むことが求められています。

つまり、個人の経験や価値観によって思いは異なるとしても、学校教育においては、Z世代と呼ばれる彼らに対し、これらの力を育成できる指導法であることが不可欠です。一回りして「トップダウン型」の社会に戻ることもできない限り、そこに議論の余地はなさそうですね。

とはいえ、礼儀やマナー、「根性」「忍耐」といった精神面の強さが不要になったわけではありません。人間関係がある限り、粘り強く取り組む力や困難に柔軟に対応する力、感情をコントロールする力や目標に向けて欲求を抑える力など、現代版「不撓不屈」はむしろこれまで以上に必要だと言えるのではない

でしょうか。

こうした力を育てるには、学校と私たち教員の進化が必要であることは言うまでもありませんが、家庭の協力も欠かせません。わかってはいても、なかなか理想どおりにいかず、つい口を出しすぎたり、感情的になってしまうこともあるかもしれません。しかし、生徒の幸せを願う気持ちは、保護者の皆さまと私たち教員で共通しています。

生徒を取り巻く大人がベクトルを揃え、伴走者として成長を支えることができれば、どんな未来が訪れようと、生徒たちはたくましく生き抜き、それぞれの幸せをつかんでくれると信じています。



成長を支える“伴走者”として

教頭 水谷 貴郎

目次

成長を支える“伴走者”として(教頭)	1
「当たり前」の反対は「ありがとう」(PTA副会長)	2
大学見学会に参加して	2

PTAの広場(各学年会員)	3
岐商祭を終えて	4
復活!! 体育大会	4

「当たり前」の反対は「ありがとう」

PTA副会長 横山 裕正

令和7年度、PTA副会長を務めさせていただいております横山と申します。今年の夏の甲子園では、本校硬式野球部が16年ぶりにベスト4へと進出し、多くの人に感動を与えてくれました。あの瞬間は、選手たちの努力はもちろん、先生方のご指導、保護者の皆さまの支え、そして在校生の温かい声援が一つになってつかんだ大きな成果だったと思います。

私は本校の卒業生で、高校時代は陸上競技部の長距離に所属し、日々部活動に励みました。当時、恩師からは「感謝を忘れるな」と常に言われていました。どんな時でも「ありがとうございます」と口にする習慣をつけなさい、と。社会人になった今、その教えが大変役立っていると実感します。何気ない日常や、誰かの支えも、決して当たり前ではありません。「当たり前」の反対は「ありがとう」です。生きていること、高校に通えること、仲間と共に過ごせること。そうした一つひとつに感謝の気持ちを持つことが、これからの人生で最も大切だと感じています。

本校は校則が厳しいと言われることもありますが、その学びは社会に出てから大いに役立ちます。私が特に誇りに思うのは、生徒の皆さんがいつも元気に挨拶をしてくれることです。その姿を見るだけで「県岐商で過ごして良かった」と心から感じます。社会に出てからも、信頼を築く第

一步はやはり「挨拶」です。小学生でもできる簡単なことですが、大人になると意外とできない人も少なくありません。けれども、元気の挨拶一つで人間関係が円滑になり、感謝の気持ちも伝わります。在校中に身につけた挨拶の習慣を、卒業後も忘れずに大切にしてほしいと願っています。

また、本校には卒業後43歳の年に「凜心会」という同窓会があり、多くの仲間が再び集まります。これは他校ではあまり見られない伝統であり、集まってみると改めて岐商愛の強さを実感します。高校時代に経験した厳しい練習や苦い思い出も、振り返ればすべてが宝物です。「ピンチはチャンス」と言いますが、辛い経験は必ず自分を成長させ、いつか必ず良い思い出に変わります。

在校生の皆さんには、日々の挨拶を大切にしながら仲間との絆を深め、多くの経験を糧にしてほしいと思います。そして卒業後も、県岐商で培った心構えと「感謝の気持ち」を胸に、それぞれの道で活躍されることを心から願っています。保護者の皆さまとも力を合わせ、子どもたちがより良い学校生活を送れるよう努めてまいりますので、どうぞ引き続きご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



大学見学会に参加して

進路指導委員長 後藤 理恵子

進路指導委員会の主な行事として、6月に大型バスを2台貸し切り大学見学会を行いました。当日は汗ばむほどの快晴に恵まれ、初の見学先となる滋賀大学彦根キャンパスと立命館大学びわこ・くさつキャンパスを訪問しました。

娘は高校卒業後の進路を考え始めた当初から変わることなく就職を希望していたため、私も進学への関心が薄く、正直なところ今回の参加はあまり意味を成さないかもしれないと懸念していましたが、それは杞憂でした。趣のある学舎やスタジアムまで備えた広大な敷地に驚き、特色あるカリキュラムに好奇心を掻き立てられ、現役大学生の生き生きとした学校案内と溢れかえる賑やかな笑顔は眩しく、心躍ります。また初体験のメニュー豊富で安く美味しい学食に



キッチンカーまであり、すべてにおいて魅力を感じずにはいられませんでした。また取得した資格を受験で活かせることも新たに知りました。人生一度きり、違う選択肢もありだなと、

思いがけず進学への興味が湧いた私は、その日のうちに進路の一つとして娘に提案したほどです。

最終的には自身でしていかなければならない進路決定、切に願うのは、子どもたちにはしがらみのない中で自由に、より多くの選択肢から夢を見つけてほしい、それに尽きます。そんな彼らを応援し見守る者として、相談されたときには必要に応じて情報共有やアドバイスできるように関心を寄せ、都合の許す限りこうした機会に触れることもまた、サポートするのに有効かつ極めて有意義だと感じ、見学会はとても良い経験となりました。百聞は一見に如かず、ぜひとも今後もより多くの方々にご参加いただけたらと思っています。

最後になりましたが、ご多忙中、迎え入れていただいた大学各位、ご尽力くださった諸先生方並びにご参加いただいたPTA会員の皆様に深くお礼申し上げます。



一歩ずつ

1年生会員 高橋 文子

何にでも興味を持ち、やりたいことの多い我が娘が、将来の自分のためにと選んだ高校が県岐商でした。親としては、学業や部活動などさまざまな分野で活躍されている生徒が多い優れた環境の中での娘の成長が楽しみな反面、きちんと付いていけるのかという不安も少し感じていました。

入学後はいくつかの部活動を見学し、悩んでいた様子でしたが、最終的に吹奏楽部に入部をしました。楽器は初心者です。その上カラーガードをやりたいと言い出したので本当に驚きました。過去の映像を見せてもらいましたが、素晴らしい！の一言で、この中に娘が入ることが全く想像できなかったのです。

そんな親の心配をよそに、娘は嬉しそうに練習に参加し、「〇〇さんステキすぎる！」

「やっとなんかできた！」などと報告をしてくれました。尊敬する先輩や大切な仲間と共に充実した毎日を送ることができていることに心から安心し、感謝の気持ちで一杯です。

早いもので入学して半年が過ぎ、現在は大会に向けて練習も厳しくなってきました。一生懸命練習していても、思うようにできず悔し涙を流すこともありました。「悔し涙なら流しても良いよ。上手になるための糧になるから。」先輩にかけられた言葉に力をもらい、また練習に励む娘。私にできることは朝送り出すことだけです。

まだまだ未熟な娘ですが、「辛いけど楽しい」と言いながら毎日練習に行きます。これからたくさん泣くかもしれないな、と思いはしますが、諦めずにやり抜く力や努力の過程などのかけがえのない財産を大切に、一歩ずつ成長して欲しいと願っています。

今を大切に

2年生会員 中橋 美枝子

県岐商に入学して、娘の生活は一変しました。徒歩15分程の中学校にも毎日ギリギリ滑り込みセーフだった登校が、電車とバスを乗り継ぎ、1時間半以上かけて通学することになったのです。それだけでも娘にとっては一大事。そしてさらに、娘のクラスはI組に加えて簿記部。この選択がこんなにも大変なことになるとは、中学生の娘には想像もつかなかったことだと思います。もちろん母である私も全く想像していませんでした。

そもそも、進学校に進んだ兄二人を見て勉強ばかりしたくないと選んだ商業高校で、受験期よりも勉強し

なければならぬ状況に、入学したての娘は戸惑いがあつたことと思います。分厚い簿記のテキストに、これでもかと配られる練習問題のプリント。毎日の部活に加えてたくさんの宿題があり、入学1か月後には受験した簿記3級。そして続けて簿記2級へ。この展開の速さに私も驚きしかありませんでした。夏休みも当然のように毎日部活があり、その頃にはこの生活にも慣れてきたように見受けられましたが、あまり学校でのことを話さない娘ですので、実際のところはどうかたなのでしょう。

2年生になり、今は迫りくる簿記1級に向けての学習に取り組んでいます。それと並行して大会の勉強もあるようで、この簿記漬けの日々は大変だと思いますが、この県岐商でしか経験できない貴重な時間を、共に学ぶ仲間と一緒に前向きに過ごしてほしいと思っています。

この3年間で将来のあなたにとって必ず糧になる。自分の力を信じて進んでいってください。いつまでも応援しています。

夢の舞台に感謝

3年生会員 小鎗 芳子

息子が小学2年の夏、初めて甲子園球場に高校野球を観戦しに行きました。地鳴りのような歓声、一生懸命な高校球児の姿に感動し、いつかこの子がこの舞台で野球ができれば…と夢を抱き毎年のように高校野球を観戦していました。甲子園は、私たち家族の夢となりました。当時、鍛冶舎監督率いる秀岳館が連続してベスト4に進み、小学生だった息子と「あの監督、岐阜出身なんだって。凄いね。」と話していました。その監督が県岐商に来たと聞き、県岐のグラウンドまで監督見たさに足を運びました。フェンスに両手をかけ、ベンチ裏から必死に覗いていた息子の姿が懐かしく感じられます。

県岐商野球部に入部し、憧れの監督に指導していただいたのは1年半程でしたが、多くのことを学び、充実した部活の時間を過ごせた気がします。監督はじめ先生方の熱く温かい指導、先輩や仲間を支えられ高校野球最後の夏は、全国ベスト4という最高の結果を得ることができました。球場での子供たちのいつもと変わらない元気ではつらつとした笑顔、ずっと一緒に子供たちを見守ってきたお母さんたちとの全力応援、グラウンドもベンチもスタンドも一体となった何とも言えない空気感。その全てが愛おしくてずっと続いてほしい時間でした。選手の1つ1つのプレーを見るたびに、入部当初から共に応援してきた母たちとの様々な時間が思い出され、私自身がもう一度、青春時代を過ごしたような素敵な時間を味わわせてもらいました。

不撓不屈の精神を体現したような試合を見せてくれた息子たちに感謝!! 素敵な3年間をありがとう!!



文化祭前日に、「優勝旗紹介」が久しぶりに実施されました。コロナ禍で中断されていたこの行事は、全国優勝をはじめ、東海大会や県大会で優勝を果たした部活動が、誇らしげに優勝旗や賞状を手に登壇する場です。会場では、輝かしい功績に拍手が送られました。

岐商祭を終えて

特別活動委員長 関口 茜

10月7日(火)、6年ぶりに体育祭が開催されました。生徒全員にとって初めての体育祭であり、屋内での実施のため、どのような雰囲気で行われるのか楽しみでした。生徒全員が全力で競技を行い、司会による競技進行や実況も、元気でいきいきとしていてとても盛り上がりました。競技の合間に突然始まるパフォーマンスやダンス、応援合戦に保護者から拍手が起こりました。部活動対抗リレーでは各部ともそれぞれの(筆や花束、ボール)大切な道具がバトンとして使われていたのには驚きましたが、楽しく観戦できました。

10月24日(金)には文化祭が行われました。今年は秋晴れのさわやかな日となりました。本部役員を中心に約1か月前から話し合いを進め、備品を確認し、前日に食材の手配と下準備を行いました。

当日は、本部役員・特別活動委員・お手伝いを引き受けてくださった方など、総勢43名で調理を開始しました。提供商品は、焼きそば・カレー・フランクフルト・ベビークラスターの4品でした。あらかじめチームを分け、担当ごとに手際よく作業を進めてくださったため、スムーズに商品提供ができたと思います。事前チケット分と、当日チケッ

ト分ともに商品は完売しました。

役員はバザーの仕事も担当しつつ、交代でステージ発表や展示を見学に行きました。各学年・各クラスそれぞれ工夫を凝らして、とても盛り上がりしていました。普段、授業や部活動では見られない表情を見ることができ楽しかったです。

中学校生活の多くをコロナ禍で過ごした生徒たちにとって、これらの行事はワクワクするイベントだったと思います。みんなで何をやるか考え、準備し、練習したことは学校生活において貴重な体験・思い出となったのではないかと思います。

最後になりましたが、ご協力いただきました先生方、PTA・保護者の皆様、本当にありがとうございました。来年度も更に充実したバザーになるよう、皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



復活!! 体育大会

前生徒会長 榎本 和馬

ここ数年、感染症の影響などで中止が続いていた体育大会を、私は生徒会長として復活させることを決意しました。前年度の生徒会から託されたことでもあります。何より「生徒の日常をもっと楽しみたい」「皆の青春を応援したい」という強い気持ちがあり、実施に踏み切りました。

再開に向けて最初に考えたのは開催場所です。学校のグラウンドは球技大会でも使用するため、特別感に欠けると感じました。「折角復活させるなら、これまでにない盛り上がりを作ろう」と考え、メモリアルセンターでの実施を決めました。

実現までには、会場の使用許可の取得、企画や運営計画、先生方との調整など、課題が山積みでした。企画

面では、誰もが楽しめる競技であることはもちろん、安全性や運営のしやすさを考慮することに苦労しました。

当日は、予定通りに進まない場面や生徒の誘導など、臨機応変な対応に苦戦しました。

しかし、先生方や生徒の協力的で活発な行動のおかげで、体育大会は成功しました。閉会式で「幸せなら手を叩こう」を皆で行ったとき、会場全体が一体となって手を叩いているように感じ、とても嬉しかったです。様々な行事と並行して準備を進めるのは大変でしたが、皆の協力のおかげで大きな成果を収めることができ、本当に良かったと思います。ご協力ありがとうございました。

